



聴くということ 応えるということ

校長 奥村 恒也

3年生のみなさんの授業での一コマです。

一人の子が黒板の前で問題の解き方について説明をしています。自分の考えをみんなに伝えようと一生懸命に話しています。他の子たちは、その説明を黒板に視線を向けて静かに聴いています。学習の基本がきちんと身に付いている素敵な姿だなと感じました。そして、さらに素敵だと感じさせられたのが前で説明する子の話が終わった瞬間です。授業を参観して多く見られる姿は説明し終わった子がみんなに対して「どうですか」と問います。その投げかけに対して「分かりました」「いいです」と応えて終わるやりとりです。しかし、3年生の子たちの姿は違っていました。説明が終わった瞬間、あちらこちらから「あーなるほど」「うん、分かった」「へえー」などなど、自然と多種多様なつぶやきがこぼれてきました。さらに、先生の説明を聴いて「僕違うやり方考えてた。それはね・・・」と自分が考えていた解き方を話し始める子、さらにその説明を聴いて「それってさぁ・・・」と自分の意見を話し始める子など、素敵な姿があふれていました。また、もう一方のクラスでは、グループでの話し合いをしていました。感染防止のため、短時間しか行えませんが、その短い時間の中で、グループの仲間が次々と自分の考えを話していました。しかも、単に自分の言いたいことだけを主張するのではなく、「○○さんが言ってたけどそれはね・・・」「そうは言ってもさぁ・・・」と仲間の意見を受け止めながら自分の意見をそれに重ねて述べていました。堅苦しい話し合いではなく、ごくごく自然な流れと相手の意見を尊重する温かい雰囲気がありました。

こうした姿は、姿勢だけを整えて聞くのではなく、話している子の考えを理解しようという心からの思いや自分はどうか考えるのかという主体的な学びからの聴く構えや応える構えが身に付いていないと成立しません。同時に、自分の考えをみんながちゃんと聴いて受け止めてくれる、大事にしてくれるという空気が学級の中に流れていないと、自分の考えや意見を自由に表出できる伸びやかな姿は生まれてきません。3年生だけではなく、どの学年のどのクラスにもこうした姿が見られます。温かい仲間関係を自分たちで作りに上げてきている本当に素敵な伏見っ子たちです。

子どもたちは学校での学びを通して、様々な仲間とかかわりながら、多様な考え方に触れ、受け止め、自ら考えるという力を身に付けていきます。互いを尊重し、異なる考え方を受容できる広い心と自ら学びに向かおうとする力をこれからも育んでいきたいと思えます。

